

【要旨】本研究は、Shibatani (2019) の体言化理論の枠組みに基づき、トルコ語の項体言化について記述・分析する。体言化とはメトニミーを認知基盤とする文法的派生プロセスである。体言化構造はメトニミーによって喚起されるコト・モノを概念表示する。体言化には通常の名詞同様、主要部名詞として指示機能を果たす名詞句用法と主要部名詞の概念表示を制限または特定する修飾用法がある。項体言化を理解するには文法関係や文法役割が重要であることが吉田 & 石川 (2022) で指摘されている。本研究はトルコ語の項体言化を対象に項体言化の用法の違いが文法関係や文法役割にどのように関わるのかについてコーパスに基づく計量的調査を行う。調査の結果、記述的には、トルコ語の項体言化では修飾用法が名詞句用法よりも頻度が高いこと、文法関係の階層で高い項は低い項よりも項体言化される割合が高いこと、修飾用法は名詞句用法よりも階層で低い文法関係の項体言化の割合が高いことがわかった。さらに、文法役割を見ると、用法を問わず S が多く、特に修飾用法では d(ervied)-S(subject) の項体言化が多いことが明らかになった。理論的には、この発見はメトニミー基盤の体言化理論によって理解することができることを主張する。こうして、本研究はトルコ語の項体言化の記述的研究だけではなく、体言化理論や文法関係の類型論に貢献する。

1. はじめに

- ・ 体言化とはメトニミーを認知基盤とする文法的派生プロセスであり、体言化構造はメトニミーによって喚起されるコト・モノを概念表示する (Shibatani 2019: 21)。
 - 体言化のうち体言化構造内にギャップがあるものは項体言化と呼ばれる。
 - 本研究の対象であるトルコ語の項体言化には 2 つのタイプがあり、(1) のように項体言化のギャップが主語の場合は接辞-*An*²、(2) のようにギャップが主語以外の項である場合は接辞-*DIK* が使われる (Underhill 1972, Dede 1978, Kornfilt 1997, Lewis 2000, Göksel & Kerslake 2005)。
 - ・ 後者の項体言化では、(2) からわかるように項体言化内の主語と述語に所有標識がつく。

(1) [<i>ø kitap oku-yan</i>] _{NMLZ} kız	(2) [<i>kız-in ø oku-duğ-u</i>] _{NMLZ} kitap
book read-NMLZR girl	girl-3.POSS read-NMLZR-3.POSS book
‘the girl who reads a book’	‘the book which the girl reads’

- (1) と (2) の体言化構造はそれぞれ、「本を読むモノ (ヒト)」、「女の子が読むモノ」を概念表示している。
 - ここでいう項体言化は、従来、関係節と呼ばれる構造に対応する。
- ・ Shibatani (2019) によれば、体言化には通常の名詞同様、主要部名詞として指示機能を果たす名詞句用法と主要部名詞の概念表示を制限または特定する修飾用法がある。
 - トルコ語では、(1)(2) に挙げた項体言化修飾用法に加え、次の (3)(4) に見られる項体言化名詞句用法も可能である。

¹ 本稿の作成にあたって、長屋尚典、林真衣、菱山沸人、諸隈夕子、吉田樹生、Yaylıoğlu Ogan の各氏から有益なコメントをいただいた。各氏に深く感謝を述べたい。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも発表者の責任である。また、本研究は JSPS 科研費 21J21799 の助成を受けたものである。本研究は、東京大学ヒューマニティーズセンター公募研究 (A) 「体言化の言語類型論: 性、数、類別詞および定性を中心に」の研究成果の一部である。

² 接辞は母音調和や子音交替による異形態をもつ場合、その交替する音は大文字で表記している。

(3) [*kitap oku-yan*]_{NMLZ}
book read-NMLZR
‘the one who reads a book’

(4) [*kız-in oku-duğ-ı*]_{NMLZ}
girl-3.POSS read-NMLZR-3.POSS
‘the one which the girl reads’

- このように体言化理論では (1)(2) と (3)(4) の違いは同じ項体言化構造の用法の違いと考える。

- 一方で、従来の研究では関係節の主要部の有無の違いであると考え (表 1)。

- 体言化理論の観点からは二つの用法は異なるふるまいが予想されるため、体言化の用法の違いに注目する必要がある。

表 1: 従来の研究理論と体言化理論の対応

Shibatani 理論	従来の先行研究	例
項体言化修飾用法	主要部あり関係節	(1)(2)
項体言化名詞句用法	主要部なし関係節	(3)(4)

- 重要なことに、ここでいう項体言化 (i.e., 関係節) は文法関係に深く関わっている。

表 2: 文法関係の階層とそれに対応する文法役割と例文

文法関係	文法役割	例文
主語	S	the man who ran
	derived-S	the man who was killed
目的語	A	the man who ate the meat.
	P	the meat which the man ate.
	T	the meat which the man gave to the girl
間接目的語	R	the girl whom the man gave the meat
斜格	--	the place where the man ran
属格	--	the man whose meat went bad
比較の対象	--	the man who I am richer than

- Keenan & Comrie (1977) は関係節化可能な文法関係についての通言語的制約である接近可能性の階層を提案した
- 表 2 において上にあればあるほど接近しやすい名詞句であり関係節化しやすい。

- さらに、文法関係に加え、S/A/P などの文法役割が項体言化を理解するのに重要であると指摘されている (吉田 & 石川 2022)。

- それぞれの文法関係に対応する文法役割を表 2 に示す。

- 文法役割もみることで主語項体言化や目的語項体言化のなかでもより詳細な傾向を明らかにすることができる。

- 最後に、トルコ語の項体言化について、実際の使用における頻度に注目する必要がある。

- これまでトルコ語の項体言化について関係節としてエリシテーションや内省に基づき記述されてきたが、実際の使用における実例や頻度に基づく研究は少ない。

- 本研究は上述したような用法の違い、文法関係、文法役割、頻度という観点を取り入れ、トルコ語の項体言化について次のような問いを立てる:

記述的問い:

- ・ トルコ語の項体言化では名詞句用法と修飾用法のどちらの頻度が高いのか。
- ・ 項体言化される文法関係・文法役割の頻度について二つの用法には違いがあるのか。

- 理論的問い: このような違いがあれば、それらは体言化理論の枠組みでどのように捉えることができるのか。

- これらの問いに答えるため、本研究はコーパスデータに基づく計量的調査を行い、トルコ語における項体言化と文法関係との関係について調査・分析を行い、次のことを主張する。
 - 記述的には、
 - トルコ語の項体言化では修飾用法が名詞句用法よりも頻度が高い。
 - 用法を問わず、文法関係の階層で高い項は低い項よりも項体言化される割合が高い。
 - さらに、階層で低い文法項の体言化は修飾用法でより割合が高い。
 - 文法役割を見ると、用法を問わず S が多く、特に修飾用法では d-S の項体言化が多い。
 - 理論的には、これらの発見はメトニミー基盤の体言化理論によって理解することができる。
- 本稿の構成: 第 2 節 (調査方法); 第 3 節 (調査結果); 第 4 節 (議論); 第 5 節 (結論)

2. 調査方法

- 本研究は、ニュースやウェブテキストなど様々なソースから成るコーパス (Leipzig Corpora Collection 2019) から 2,000 文を収集し、その 2,000 文における項体言化の例を対象に調査を行う。
- コーパス情報: 2014 年にニュースやウェブテキストなど様々なソースから集められた 1 万件の例文を含む (ファイル: tur_mixed_2014_10K)
- 具体的な手順は以下の通り:
 - 上述のファイルから最初の 2,000 件の例文を使用する。
 - エクセルファイル上で、2,000 件の例文すべてを目視し、項体言化の例を手作業で抽出する。
 - 抽出した項体言化の例に対して、(a) 標識 (-An/-DIK)、(b) 用法 (名詞句用法/修飾用法)、(c) どの文法関係が項体言化されているのか (主語/目的語/間接目的語/斜格/属格/比較の対象)、(d) どの文法役割が項体言化されているのか (S/d-S/A/P/T/R) についてアノテーションする。
 - アノテーションしたファイルを csv ファイルとして R で取り込み、(iii) に挙げたそれぞれの項目について数を数える。

3. 調査結果

- 本節では -An 項体言化と -DIK 項体言化の使い分けを実例とともに示し (第 3.1 節)、用法の違いが 2 種類の項体言化の使い分け (第 3.2 節)、文法関係 (第 3.3 節)、文法役割 (第 3.4 節) とどのように関わっているのかについての調査結果を示す。

3.1. -An 項体言化と -DIK 項体言化の使い分け: 文法関係と文法役割

- 様々な先行研究で -An 項体言化と -DIK 項体言化の使い分けについて記述されている (Underhill 1972, Kornfilt 1997, Dede 1978, Lewis 2000, Göksel & Kerslake 2005 らの関係節に関する記述)。
 - 項体言化のギャップが主語、主語の一部を成す属格、主語が不定である場合に名詞句の一部を成す属格、行為が行われる場所を表す名詞句である場合は -An が使われる。
 - 項体言化のギャップがそれ以外の場合は -DIK が使われる。
- 二つの種類の項体言化は先行研究で指摘された通り使い分けられた。
 - 以下に本研究のコーパス調査で見つかったそれぞれの文法関係・文法役割の項体言化の例を示す。

-An 項体言化

- (5) Ama *çıldır-an-lar* var, isyan *ed-en-ler* var. (主語; S と主語; A)
 but go.mad-NMLZR-PL exist rebellion do-NMLZR-PL exist
 「しかし、怒る人がある; 反乱を起こす人がある。」

- (6) *Dışişleri'n-den* *yap-ıl-an* *açıklama-da ...* (主語; derived-S)
 Ministry of Foreign Affairs-ABL make-PASS-NMLZR explanation-LOC
 「外務相から出された声明では…」

-DIK 項体言化

- (7) *...gör-dük-ler-i-m-i* *ve* *yaşa-dık-lar-ım-ı* *anlat-tığ-ım*
...see-NMLZR-PL-1SG-ACC and *experience-NMLZR-PL-1SG-ACC* *explain-NMLZR-1SG*
bütün *işçi-ler...* (目的語; P/間接目的語; R)
whole *worker-PL*
 「…見たこと経験したことを私が説明した全ての労働者は…」
- (8) *...anne-ler-in* *çocuk-lar-ın-a* *ver-diğ-i* *ceza-lar-da...* (目的語; T)
...mother-PL-POSS *child-PL-3.SG-DAT* *give-NMLZR-ACC* *panishment-PL-LOC*
 「…母親たちが子供たちに与えた罰において…」
- (9) *Alevi* *vatandaş-lar-ın* *çoğunluk-ta* *ol-duğ-u* *Tunceli, ...* (斜格)
Alevi *citizen-PL-POSS* *majority-LOC* *exist-NMLZR-3SG* *Tunceli*
 「アレヴィ市民が多数派を占めているトゥンジェリは…」
- (10) *...iç-in-de* *bulun-duğ-umuz* *minibüs ...* (属格)
inside-POSS-LOC *exist-NMLZR-1PL* *minibus...*
 「…このバスは… (直訳: 私たちが中にいるミニバスは…)」

3.2. -An 項体言化・-DIK 項体言化と用法

- 表 3 と図 1 は -An 項体言化と -DIK 項体言化の用法ごとの頻度を示す。
- An 項体言化は -DIK 項体言化より使用頻度が高かった。
 - 2000 件の例文の中で、-An 項体言化は 606 例、-DIK 項体言化は 208 例見つかった。
- An 項体言化と -DIK 項体言化のどちらの項体言化でも名詞句用法よりも修飾用法が頻繁に使われた。
 - An 項体言化では名詞句用法が 65 例に対して、修飾用法が 541 例見つかった。
 - DIK 項体言化では名詞句用法が 11 例に対して、修飾用法が 197 例見つかった。

表 3: -An 項体言化と -DIK 項体言化の頻度と割合

	名詞句用法	修飾用法	合計
-An	66 (10.8%)	544 (89.2%)	610 (100.0%)
-DIK	13 (6.3%)	195 (93.8%)	208 (100.0%)

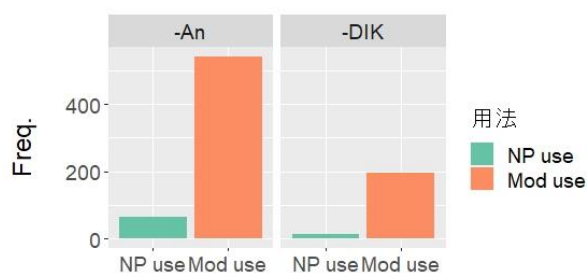


図 1: -An 項体言化と -DIK 項体言化の用法の頻度

3.3. 項体言化における文法関係と用法

- 表 4 と図 2 は用法ごとにどの文法関係が項体言化されやすいかの頻度と割合を示している。
- 用法を問わず、文法関係の階層で高い項は低い項よりも項体言化される割合が高かった。
 - 文法関係の階層で高い項である主語と目的語の項体言化は名詞句用法で 100%、修飾用法で 88% を占めた。
- 修飾用法では名詞句用法とは異なり、文法関係の階層で低い項の項体言化の例が見つかった。
 - 具体的には、名詞句用法では主語と目的語の項体言化の例しか見つからなかった一方で、修飾用

法では間接目的語、斜格、属格の項体言化も見つかった。

- トルコ語の項体言化では修飾用法の方が名詞句用法よりも広範囲の文法関係が許容され、頻度も高い。

表 4: 項体言化された文法関係の頻度と割合

文法関係	名詞句用法	修飾用法
主語	66 (83.5%)	540 (73.3%)
目的語	13 (16.5%)	110 (14.9%)
間接目的語	0 (0%)	12 (1.6%)
斜格	0 (0%)	73 (9.7%)
属格	0 (0%)	3 (0.4%)
合計	79 (100.0%)	738 (100.0%)

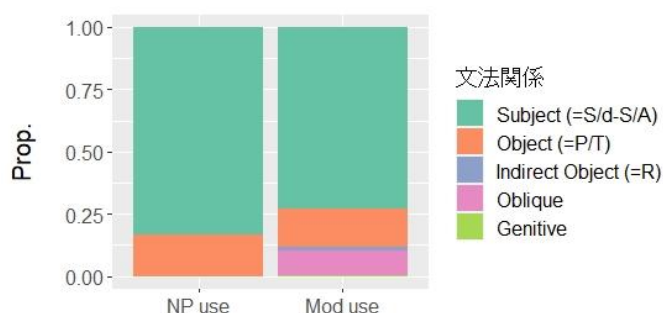


図 2: 項体言化された文法関係の割合

3.4. 項体言化における文法役割と用法

- 表 5 と図 3 は用法ごとにどのマクロロールが項体言化されやすいかの頻度と割合を示している。
- 主語の項体言化において、どちらの用法でも S の項体言化の割合が高かった。
 - 名詞句用法で 42 例 (53.2%)、修飾用法で 262 例 (39.5%) 見つかった。
- さらに、修飾用法での derived-Subject の項体言化の割合が高かった。
 - 具体的には、165 例 (24.8%) もの derived-Subject の項体言化の例文が見つかった。
- 目的語の体言化において、どちらの用法でも、P の項体言化が T の項体言化よりも割合が高かった。
 - 名詞句用法では、P 項体言化が 11 例 (13.9%) であるのに対して T 項体言化は 1 例 (1.3%)。
 - 修飾用法では、P の項体言化が 103 例 (15.5%) であるのに対して T 項体言化は 6 例 (1.0%)。
- トルコ語における主語・目的語項体言化について、文法役割をみると S や derived-S、P が多いなどの偏りがあることがわかった。

表 5: 項体言化された文法役割の頻度と割合

文法役割	名詞句用法	修飾用法
S	42 (53.2%)	262 (39.5%)
d-S	6 (7.6%)	165 (24.8%)
A	19 (24.1%)	115 (17.3%)
P	11 (13.9%)	103 (15.5%)
T	1 (1.3%)	6 (1.0%)
R	0 (0%)	13 (2.0%)
合計	(100.0%)	(100.0%)



図 3: 項体言化された文法役割の割合

4. 議論

4.1 本研究の新たな観点と発見

- 本研究の調査の結果、次のようなことがわかった。
 - An 項体言化と-DIK 項体言化の使い分けは先行研究通りである (第 3.1 節)。
 - An 項体言化と-DIK 項体言化の頻度については-An 項体言化の方が頻繁に使用される (第 3.2 節)。
 - トルコ語の項体言化について修飾用法は名詞句用法より頻度が高い (第 3.2 節)。

- 文法関係の階層で高い項は低い項よりも項体言化される割合が高い (第 3.3 節)。
- 階層で低い文法項の体言化も修飾用法でより割合が高い (第 3.3 節)。
- 文法役割を見ると、用法を問わず S が多く、修飾用法では d-S の項体言化が多い (第 3.4 節)。
- 本研究は体言化理論 (用法の違い)、頻度、文法役割という新たな観点でトルコ語の項体言化を分析した点で意義がある。
 - 修飾用法が名詞句用法より頻度が高いことは、用法の違いや頻度に注目したので今回初めてわかったことであり、記述的貢献がある。
 - S や derived-S が多いことや、複他動詞の頻度の差によるものであろうが、P よりも T の頻度が少ないことなども今回初めて明らかになったことである。

4.2 類型論におけるトルコ語の項体言化の位置づけ

- トルコ語の項体言化は他の言語の項体言化と比較し、次の特徴がある。
- 第一に、トルコ語の項体言化では、ほかの言語と比べて修飾用法の割合が非常に高い。
 - 例えば、タガログ語の項体言化では名詞句用法が修飾用法よりも頻度が高いことと (表 6) 対照的である。
 - Shibatani は名詞句用法から修飾用法へと体言化の用法が拡張すると考えており、その点を踏まえるとトルコ語のこの特徴は興味深い。
- 第二に、トルコ語の項体言化では、ほかの言語と比べて主語の項体言化の頻度が高い。
 - 話し言葉においては、英語でもドイツ語でも主語よりも目的語の関係節化の頻度が高いと報告されている (Diessel 2009)。
 - L2 日本語学習者の名詞修飾構文の産出についての研究である大関 (2020) では、トルコ語母語話者の日本語学習者が他の言語の母語話者よりも日本語で主語項体言化を産出する頻度が高かったことが報告されており、これもトルコ語において主語項体言化の頻度が高いことが反映された結果かもしれない。

表 6: タガログ語の項体言化の用法ごとの頻度と割合 (Nagaya 2019)

用法	頻度 (割合)
名詞句用法	134 (81.2%)
修飾用法	31 (18.8%)
合計	165 (100%)

4.3 トルコ語の項体言化と主語

- 主語項体言化の中でも S の項体言化、特に修飾用法では d-S の項体言化の使用の割合が高かった。
 - 後者に関しては目的語の項体言化ではなく項体言化が多いということは目的語を受動化することで主語に昇格させて d-S の項体言化にしているのではないか。
- 主語項体言化が多かったのはレジスターが関係してる可能性があるかもしれない。

4.4 トルコ語の項体言化では修飾用法で幅広い文法関係・文法役割が許容されるのはなぜか

- トルコ語の項体言化の修飾用法の幅広さはメトニミー基盤の体言化理論によって理解することができる。
 - 文法関係・文法役割の階層で高い文法項は広範囲の事象タイプに関連し、事象において顕著な事象参与者であるため、メトニミーにより喚起しやすい (Shibatani 2019)。
 - 事象において顕著である参与者は、メトニミーにより喚起しやすく、主要部名詞がなくとも、その項体言化自体でのみで判断できるため、そのような場合は名詞句用法が使われることができる。

- 例えば、(11) の目的語の項体言化では、文法関係の階層で高い文法項の項体言化であり、読まれる対象は事象において顕著であり、メトニミーによって喚起されやすいため、名詞句用法でも指しているものがある。
- 一方で、文法関係・文法役割の階層で低い項は、事象において顕著な参与者ではなく、メトニミーによって喚起されにくい、項体言化自体が何を喚起しているのかは主要部によって明示する必要があるため、修飾用法が使われやすい。
- 例えば、(12) の場所名詞句を表す斜格の項体言化では、文法関係の階層で低い文法項の項体言化であり、読む場所は事象において顕著ではなく、メトニミーによって喚起されにくい、修飾用法で表され、主要部名詞で *yer* ‘place’ と明示される。

(11) <i>kız-ın</i>	<i>oku-duğ-u</i>	<i>kitab</i>	(12) <i>kız-ın</i>	<i>oku-duğ-u</i>	<i>yer</i>
girl-3.POSS	read-NMLZR-3.POSS	book	girl-3.POSS	read-NMLZR-3.POSS	place
‘the book which the girl reads’			‘the place which the girl reads.’		

- 言語類型論や言語獲得などの研究で文法関係について接近可能性の階層が提唱・支持されてきたが、関係節化や接近というプロセスはなく、メトニミー基盤である体言化でこそ本研究の発見をうまく理解できるのではない。

5. 結論

- 本研究はトルコ語の項体言化について体言化理論の文脈で用法の違い、文法関係、文法役割、頻度に注目して調査を行った。
- 本研究は、トルコ語の項体言化を新たな観点から調査した点でトルコ語の記述的研究に貢献があるだけでなく、体言化理論や文法関係についてなどの理論的研究にも大きな貢献がある。

【参考文献】 Dede, Müşerref. 1978. Why should Turkish relativization distinguish between subject and non-subject head nouns? *Berkely Linguistics Society* 4. 67–77./ Diessel, Holger. 2009. On the role of frequency and similarity in the acquisition of subject and non-subject relative clauses. In T. Givón & Masayoshi Shibatani (eds.), *Syntactic complexity: Diachrony, acquisition, neuro-cognition, evolution*. 251–276. Amsterdam: John Benjamins./ Göksel, Aslı & Celia Kerslake. 2005. *Turkish: A comprehensive grammar*. London & New York: Routledge./ Keenan, Edward L. & Bernard Comrie. 1977. Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry* 8(1). 63–99./ Kornfilt, Jaklin. 1997. On the syntax and morphology of relative clauses in Turkish. *Dilbilim Araştırmaları* 8. 24–51./ Lewis, Geoffrey. 2000. *Turkish grammar*. 2nd edn. Oxford: Oxford University Press./ Leipzig Corpora Collection. 2019. Turkish news corpus based on material from 2019. Dataset. 2019. https://wortschatz.uni-leipzig.de/en/download/Turkish#tur-tr_web_2019./ Nagaya, Naonori. 2019. Relativization in Tagalog conversation: A typological perspective. ALT13, Pavia, Italy./ Shibatani, Masayoshi. 2019. What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization. In Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani & David W. Fleck (eds.), *Nominalization in languages of the Americas*, 15–167. Amsterdam: John Benjamins./ Underhill, Robert. 1972. Turkish participles. *Linguistic Inquiry* 3(1). 87–99./ 吉田樹生 & 石川さくら. 2022. 体言化理論における文法関係と概念表示: インド・アーリア諸語の用言基盤体言化から. 日本言語学会第165回大会./ 大関浩美. 2020. 中級日本語学習者の名詞修飾節使用における母語の影響. パルデシプラシヤント & 堀江薫 (eds.), *日本語と世界の言語の名詞修飾表現*, 43–56. 東京: ひつじ書房.